

地球環境時代を迎え、環境デザイン(ランドスケープデザイン)の分野は、人間活動の場となる建築や都市やオープンスペース、またその土台となる自然環境を包括しながら、これらの良好な関係を築く営みとして、近年ますます重要性が高まっている。本学においては1976年に環境計画学科の創設以来、現在では建築学科の一分野として脈々と環境デザイン教育の流れが受け継がれている。

1. 研究の背景と目的

筆者はこの2021年度より本学建築学科の環境デザイン分野の教員に着任した。それまでは主にランドスケープデザインの設計実務に携わりながら、2004年以降、本学以外の5つの大学で非常勤講師として環境デザイン教育に関わってきた。その中で経験した、大学間連携プログラムである「京都ランドスケープデザイン展(以下「KLD展」と称する)」への参加が各大学の教育において大変有意義であることを実感してきた。しかし本学では環境デザイン学科の廃止を期に2014年以降参加を見送ってきた。本研究は、本学のKLD展への参加復活を果たすとともに、その意義を明確にしなが、その効果の検証と学内教育へのフィードバックを行い、本学建築学科における環境デザイン教育の向上に資することを目的とするものである。

2. 大学間連携による環境デザイン教育の場としての合同作品展

日本における環境デザイン教育は、建築土木系をはじめとする学部学科の中の限定的なカリキュラムとして行われるケースが多く、ランドスケープを専門とする教員・研究者は各大学に1~2名いれば良いというのが実情である。これに対し、関西では2001年にランドスケープ系の研究室をもつ大学が連携し合同作品展「ランドスケープ6大学展」を開催したのをきっかけに、現在では10大学が参加するKLD展へと発展を遂げながら、貴重なランドスケープ教育の場を育んできた。なお関東でもこの流れを受けて、2013年から5大学連携による「日比谷ランドスケープデザイン展」が開催されている。

3. 大阪芸術大学における環境デザイン教育の課題

本学は2001年の「ランドスケープ6大学展」創設以来2013年までの13年間に渡りこのプログラムに参加してきたが、前述の通りその後2020年までの7年間は不参加となっていた。2021年に筆者が本学教員に着任した際にそれまでの本学学生の設計作品を概観して、他大学と比べてかなりレベルが下回っているという印象を受けた。そしてそれは、大学間連携プログラムであるKLD展から遠ざかったことによる影響が大きいのだろうと感じた。芸大という本学ならではの特色を生かした教育を進める一方で、他大学の特色や価値観にも触れながら、広い視野で環境デザインの可能性を広げていくような教育が必要であろう。そしてその課題解決の手段として、KLD展への参加復帰を実践目標として掲げ、作品制作とその指導に取り組んだ。

4. KLD展2021への参加の教育的意義と効果

KLD展参加のための作品制作は、設計実習や卒業制作など、各大学の教育プログラムの中で制作したものの中から選出される(各大学から最大4作品程度)。本学では、3年生環境デザイン分野の設計実習作品と、大学院修士1年生の授業の中で設定した小課題を通じて、出展作品の制作・指導を行った。

(1) 情報共有による共走意識の醸成

大学間連携のメリットとして「情報共有」が挙げられる。他大学の作品に触れることで、より広い視野で環境デザインを捉えるきっかけとなると共に、自らのレベルを自覚する良い機会となる。近年の作品については教員間でデータ共有を行っており、これらを実際に見せながらの指導方法は大変効果的であった。KLD展は創設当時から教育を主眼とし、一等賞を争うような競争を目的としていない。それでも、学生達同士が互いを意識しながら切磋琢磨する「共走」の意識を醸成する場としての意義は大きいと考える。

(2) ランドスケープデザインの可能性の追求

本学のように建築系の中で環境デザインを学ぶというケースでは、必然的に建築的な視点で評価される場合が多い。しかし環境デザインとは本来的に必ずしも建築を伴うものではない。KLD展のような、ランドスケープデザインの視点に立脚した評価の場があることは、環境デザインを学ぶ学生にとっては大変有意義である。出展を目標に制作を行うことにより、環境デザインの意味や可能性を深く意識させる効果が高まるものと考えている。

(3) 作品発表と講評によるフィードバック

KLD展2021では32の作品が出展された。そのうち、事前投票により選出された14作品について、各大学の教員10名による本講評会を行った。その他の作品についても、KLD展OB・OGの若手実務者による講評会が企画され、2回に分けて行われた。更にこれらとは別枠で、KLD展の礎を作られたランドスケープ・アーキテクトの佐々木葉二氏による講評会も開催された。様々な評価に触れることでのフィードバック効果は大きい。教員にとっての研鑽の場ともなっており、更にOB・OG講評会は若手環境デザイン教育者の人材育成の場としても期待できる。

5. 研究の成果と今後の課題

本学からは、3年生の作品1点と、大学院修士1年生のグループ作品1点が出展を果たした。後者の作品「ツバル水没への試案」に対して佐々木葉二賞を頂くことができた。ランドスケープデザインの可能性を追求した結果として、「生態系の仕組みとその背後にあるダイナミズムに注目したデザインとして画期的であり、その姿勢を高く評価」して頂けたことは大きな成果であった。学部生の作品については、特に意識の高い学生において、他大学の作品に刺激を受けて表現レベルに格段の向上が確認できた。一方、全体的な作品レベルの向上については、今後の更なる課題として残された。